

秋 田 県 に お け る ナ バ ナ の 栽 培 法

第 1 報 ナバナの生育特性と摘心方法

田 村 晃・田 口 多喜子・明 沢 誠 二

(秋田県農業試験場)

Cultivation of *Brassica campestris* L. in Akita Prefecture.

1. The effect of seeding date and pinching on the growth and yield in *Brassica campestris* L.

Akira TAMURA, Takiko TAGUTI and Seiji AKESAWA

(Akira Agricultural Experiment Station)

1 は じ め に

秋田県は冬期に低温、多雪、寡日照条件となるため、冬期間の野菜生産は少ない。そこで、低温耐性のあるナバナを導入し、200kg/a以上の収量を得る栽培法を確立するため、生育特性と摘心方法について検討した。

2 試 験 方 法

- (1) 試験場所 秋田農試圃場
ファイロンハウス (800m²)
- (2) 供試品種 オータムポエム
- (3) 土壌条件 細粒灰色低地土
施肥前 EC 0.3mS/cm pH 6.0
- (4) 試験区の構成
 - 1) 区制 1区 23株 2区制
 - 2) 播種期試験 (1992年)

播種期	8月5日	9月10日	9月21日
		9月30日	10月12日
(定植期)	8月26日	10月5日	10月19日
		10月28日	11月10日
 - 3) 摘心方法試験
 - a. 1991年 (9月10日播種)

5節, 8節, 10節, 主茎収穫摘心
 - b. 1992年 (9月10日播種) 出蕾期, 主茎収穫摘心
- (5) 耕種概要
 - 1) 播種方法 7.5cm径ポリポットに播種
 - 2) 施肥量 (kg/a)

N-1.0 P₂O₅-1.3 K₂O-1.0 (全量基肥)

ようりん-6 苦土石灰-10 堆肥-200
 - 3) 栽植密度 畝幅 140cm
株間 30cm 2条植 (476株/a)
 - 4) 本試験は不織布で夜間保温 (12月15日以降) し、無加温栽培で行った。

3 試験結果及び考察

収穫開始期までの生育は、平均気温が15℃以上では非常に旺盛であるが、気温の低下とともに緩慢となった。一定

の生育量を確保するためには、平均気温が10℃以上、最低气温が5℃以上必要とみられた。高温期に生育した場合は、出蕾期までの出葉数が多く、低温期に生育するにしたがって、出葉数が少ない状態が出蕾した。‘オータムポエム’の場合、8月5日播種の高温期に生育した場合でも花芽分化することから、花芽分化には一般のアブラナ科野菜のような低温遭遇を必要としないとみられた。出蕾期までの播種後日数は8月5日播種が50日、9月10日播種が39日、9月21日播種が42日、9月30日播種が44日、10月12日播種が63日であった (図1)。

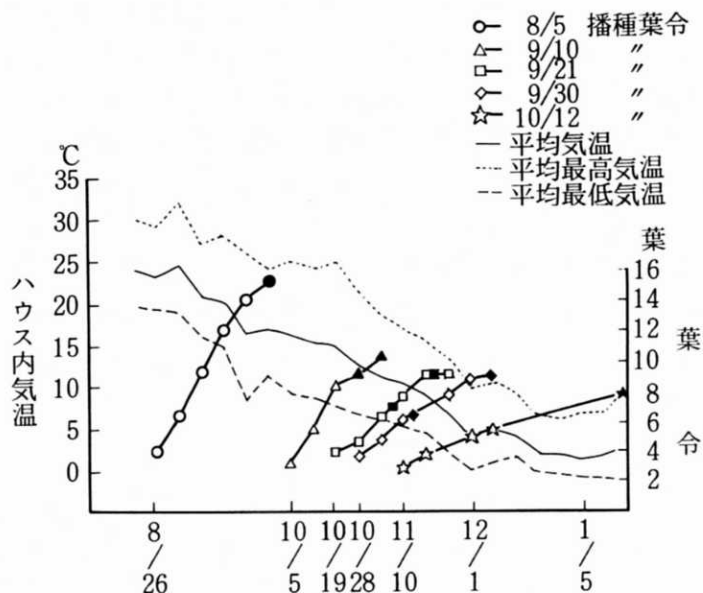


図1 ハウス内気温と播種時期別葉令

収穫開始期の生育は、高温期に生育した場合は草勢が勝った。9月10日、9月21日播種では葉令、生体重、葉面積が一定程度確保できたが、9月30日以降の播種では生育量が低下し、収穫開始期が大幅に遅れた。収穫を円滑に行うためには1株当たり生体重が200g、葉面積が2,000cm²程度必要とみられた (表1)。

主茎収穫摘心に対して、摘心節位を制限して収量を比較した場合、5節摘心では一次分枝、二次分枝の収穫本数が少なく、収量が低かった。10節摘心では二次分枝の収穫本数が少なく、また、1本重も低く、収量が低かった。主茎収穫摘心は、結果的に、8葉程度の主茎葉が残った。この

ため、主茎収穫摘心は一次分枝、二次分枝ともに8節摘心と同様の傾向を示し、収量が高かった(表2)。

出蕾期摘心と、主茎を収穫した場合を比較すると、合計収量は大差がなかったが、二次分枝はやや出蕾期摘心が勝った。主茎は茎径が太く、葉が多いため、商品としてはB品となる。一次分枝と二次分枝の合計収量は出蕾期摘心が勝るので、10月から11月上旬にかけて、ナバナの品薄期で、かつ、草勢が旺盛な場合は主茎を収穫しても良いが、それ以外は、出蕾期に摘心する方法が良いとみられた(表3)。

表1 各播種期の収穫開始期における生育状況(1992)

播種期	調査時期 (播種後日数)	葉令 (葉)	草丈 (cm)	1株当 生体重 (g)	1株当 乾物重 (g)	1株当 葉面積 (cm ²)
8/5	9/30(56)	11.8	61.2	790	47.9	7,593
9/10	10/30(50)	9.5	48.8	237	14.6	2,300
9/21	11/20(60)	9.1	51.6	217	14.6	2,196
9/30	12/8(69)	8.8	38.9	84	5.9	945
10/12	1/19(99)	—	20.9	52	4.3	503

表2 1株当たりの部位別収量(1991)

(10g以上の収穫物)

項 目 区	主 茎			1次分枝			2次分枝			合 計			a換算
	1本重 (g)	収穫 本数 (本)	収量 (g)	1本重 (g)	収穫 本数 (本)	収量 (g)	1本重 (g)	収穫 本数 (本)	収量 (g)	1本重 (g)	収穫 本数 (本)	収量 (g)	収量 (kg)
5節摘心				28.1	5.9	165.8	20.2	9.5	191.9	23.1	15.4	359.9	171.5
8節摘心				23.0	8.6	197.8	18.9	13.2	250.9	20.6	21.8	448.7	213.6
10節摘心	15.6	0.2	3.1	17.6	10.0	176.0	19.0	10.5	199.5	18.3	20.7	378.8	180.1
主茎収穫摘心	28.2	1.0	28.2	22.6	8.6	194.4	18.3	13.3	243.4	20.3	22.9	465.9	221.1

表3 1株当たりの部位別収量(1992)

(10g以上の収穫物)

項 目 区	主 茎			1次分枝			2次分枝			合 計			a換算
	1本重 (g)	収穫 本数 (本)	収量 (g)	1本重 (g)	収穫 本数 (本)	収量 (g)	1本重 (g)	収穫 本数 (本)	収量 (g)	1本重 (g)	収穫 本数 (本)	収量 (g)	収量 (kg)
出蕾期摘心				26.5	7.4	195.6	16.9	15.0	252.6	20.0	22.4	448.2	213.3
主茎収穫摘心	20.7	1.0	20.7	25.5	7.8	199.9	16.2	13.0	210.8	19.7	22.1	435.5	207.3

4 ま と め

‘オータムポエム’の収穫開始期の生育量は、1株当たり生体重が200g、葉面積が2,000cm²程度必要とみられた。この生育量を確保するためには、平均気温が10℃、最低気

温が5℃以上必要とみられた。摘心は前述の生育量の場合、主茎葉を8葉程度残してピンチするのが適当とみられた。摘心時期は、10月から11月上旬のナバナの品薄期で、かつ、草勢が旺盛な場合は主茎を収穫しても良いが、それ以外では、出蕾期に摘心するのが良いとみられた。